

対外交渉史からみた地域研究

地域（史）研究（課題番号：177001）

研究期間：平成29年7月25日～令和2年3月31日

研究代表者：武末純一 研究員：星乃治彦

研究成果

武末は、日本国内および韓国の研究者と共に、弥生時代の日韓交渉を主に研究した。

まず、韓国青銅器時代を早、前、後、晩期の4期に分けて、戦国時代鉄器文化の流入以後を鉄器時代に、鍛造の武器と農工具が拡散して瓦質土器をはじめとする三韓土器が使用される時期を原三国時代（または三韓時代）に区分するのが妥当だという見解が李健茂によって提示された。この場合、青銅器時代早期は河岸段丘に小数が列状配置された小規模集落および石床囲石式炉跡、甕坑の採択、突帯文土器、武器以外の小型青銅器（刀子、管玉）使用などを特徴とみなせる。前期は住居形態の定型化および集落の丘陵地域拡散、支石墓・周溝石棺墓のような権威的墓の登場、新青銅器文化要素（遼寧式銅劍、銅鏃）の流入、二段柄式石劍と二段茎式石鏃の出現および拡散、馱三洞式、可楽洞式、欣岩里式等、三大土器型式の盛行等の特徴と見なせる。後期は住居規模の小型化、松菊里型住居に代表される地域別新住居型式（北漢江流域の泉田里式住居、慶尚道地域の検丹里型住居等）の登場、拠点集落の形成、環濠集落の盛行、稲作農耕拡散、石棺墓、甕棺墓などの墓制採択、松菊里型土器、遼寧式銅劍、扇形銅斧、一段柄式石劍・石鏃、抉入石斧などの盛行が特徴になる。晩期は新文化（粘土帯土器文化）の登場、高地性集落形成、丘陵頂上部の推定祭儀場盛行、積石石棺墓と木棺墓等新墓制の採択、韓国式銅劍文化の定着と青銅器製作の多様化、劍、鏡、玉など権威的副葬品採択、磨製石劍の消滅などを上げられる。

特に江原道旌善郡余糧里のアウトラジ遺跡で鍛造の青銅製装身具（小型の管玉と指輪形装身具）が出土したことで、韓国の青銅器時代設定は確固たるものになった。こうした早期遺跡の文化内容は、中国－韓国－日本をつなぐ先史文化の流れを理解するのにたいそう重要になる。

日本の弥生時代で日韓の文化交渉は、韓国青銅器時代後期（松菊里類型段階）に起こる。この時期には墳墓に副葬される赤色磨研壺が増加するが、北部九州でも弥生時代開始期の佐賀・福岡一帯で赤色磨研壺が登場する。この一帯の支石墓構造と副葬様相を見れば、北部九州赤色磨研壺の起源地が韓半島南部地域だと見なせて、襄真晟はその中でも咸安から金海に至る地域が有力だと見る。安在皓は達城坪村里遺跡で出土した松菊里型甕棺に見えるハケメ調整技法は弥生土器の特徴で、深鉢や赤色壺を甕棺で利用したために弥生人が関与して製作した土器の可能性が高いと見なし、多数の弥生人が定着して無文土器人と混居したと見て、金泉智佐里遺跡、昌原上南遺跡、昌原網谷里遺跡などでも弥生系壺と見なせる土器が出土したとする見解を提示したが、この点は今後の検討課題である。

一方、2000年代初めの水田調査と研究成果を基礎に、水田の類型化研究が進展した。韓国青銅器時代水田の構成を、西日本弥生時代水田類型と比較した灌漑システムに対する最近の研究も注目される。農耕文化の日本列島への波及と拡散には農耕道具の変遷と共に、食糧需給にともなう可耕地の拡散、そして灌漑システムに至るまでの一連の内容を検討せねばならないために、両国の水田遺跡に対する灌漑システムの分析は今後、農耕文化についての交渉をより確然と示してくれるものと展望される。基本的にこの時期には水田農耕法と共に支石墓や石棺墓、木棺墓などの墓制が日本の九州地域に入るが、木棺墓の副葬品に磨製石劍と磨製石鏃、赤色磨研土器などが入って、韓半島の様相と同一なことを示してくれる。平郡達哉によると、このような副葬品セット関係と副葬位置は、単純な物品の伝来ではなく葬送儀礼を包含した埋葬制度の伝播を物語る。

韓半島の石器の中で有節柄式石劍、一段柄式石劍などの磨製石劍と単刃（片刃）石斧、半月形石庖丁のような

磨製石器類と同一な形式が、日本九州地域一帯の弥生時代早期遺跡で発見されているのは、文化伝播または両地域の文化接触の結果と見なせる。孫峻鎬は、これと合わせて弥生早期に収穫具と石器加工具の比率が急激に増加することは、石器だけでなく製作技術まで韓半島で一緒に伝来したことを語るとする。

武末は弥生人の思想を端的に表現した環溝集落こそが、縄文時代と弥生時代を区分する指標と考えている。この点で、九里土坪洞遺跡での韓半島青銅器時代早期を上限とする環溝集落の確認は重要である。この環溝は円形で内部に何もない儀礼空間の広場だけを囲み、住居はその外側に営まれる。環溝集落が戦争と共に出現するのではないことを示す点でも重要である。

弥生時代のはじまりと大きく関わった韓半島南部の青銅器時代後期の社会は、金権九や李宗哲らの検討によって前期の大型住居中心の集落から、小型住居が普遍的になり一定の階層分化を遂げていたことが示されたのも大きな成果で、弥生時代の開始期に農耕文化を伝えた側の様相が明らかになったといえる。また、その階層社会が開始期の弥生時代にそのまま実現はされず、今一度、格差があまりない状態から出発したといえる。

これまで弥生時代早期～前期初とされた鉄器は、再検討が進んだ結果、いずれも当該時期の資料とするには難があることが明らかになった。今のところ確実な弥生時代の鉄器の出現は、後述する資料から見て前期末といえる。そうすると、弥生前期後半までは福岡県福津市今川遺跡で出土した遼寧式銅剣加工の銅ノミ・銅鎌（前期初頭）や福岡県小郡市三沢北中尾遺跡の長方形銅斧（前期中ごろ）があり、石器の中にごく少数の青銅器が存在する。この時期を新石器弥生時代とする説も提起されているが、韓半島の青銅器時代早期にもごく少数の青銅器しかない点を勘案すれば、弥生時代早期～前期後半は日本青銅器時代に相当するといえる。

考古学による弥生時代前半期の暦年代の推定では、資料が多い韓半島の土器・青銅器編年との併行関係の設定が重要で、第1期では剣身上半部が短い遼寧式銅剣が、清州鶴坪里遺跡の青銅器時代住居跡出土して可楽里式土器（無文土器前期前半）まで遡ることが明らかになった。この形態は遼東地域で古いとされる初期の形態であり、遼寧式銅剣の遼東起源説が有利になった。これら遼東地域の初期遼寧式銅剣の暦年代は西周中期（紀元前10世紀ごろ）が上限とみなされ、清州鶴坪里住居跡出土遼寧式銅剣はその次の段階である。石鎌の形態から見て青銅器時代前期後半に位置する欣岩里式段階の春川牛頭洞A地区石棺墓でも、同様な初期遼寧式銅剣が出土している。これら初期遼寧式銅剣は、身の上半部と下半部の比が大まかに言って1：2程度である。これに対して、出土土器から青銅器時代後期前半の休岩里式段階に属する金泉松竹里遺跡の遼寧式銅剣は身の上半部と下半部の比が

2：3程度になって、遼西地域の小黒石溝M8501墓出土例と同様な比率を示し、紀元前8世紀ごろに年代の1点が置かれる。青銅器時代後期後半の松菊里石棺墓出土遼寧式銅剣は身の上半部と下半部の比がほぼ1：1で、遼西地域の十二台営子例と同様な比率だが、大型化しており、十二台営子の時期よりも新しくなるとみられる。

また、遼寧式銅剣に伴う扇形銅斧は、細長い形態から短くてくびれて刃部の広がり著しい形態へ変遷し、袋口部も長方形から扁六角形そして長楕円形へと変遷するとともに上方に広がるから、松菊里式土器の下限は松菊里遺跡5—8号住居上層で出土した上下に広がる扇形銅斧の鋳型からみて、紀元前5世紀頃でよい。

したがって、弥生時代早期の上限年代は併行する休岩里式段階の紀元前8世紀ごろとみられ、可楽里式や欣岩里式の年代である紀元前10世紀ごろまでは古くならないと考える。また、弥生時代前期初頭は、今川遺跡の銅鎌が松菊里石棺墓出土例と同様な遼寧式銅剣を加工したとみられ、今川遺跡で板付Ⅰ式に伴う無文土器が松菊里式段階の末期とみられることから、紀元前5世紀ごろと考えられる。

福岡県小郡市三沢北中尾第2地点127号貯蔵穴の長方形銅斧の破片は、板付Ⅱa式新段階～板付Ⅱb式古段階に属し、韓半島の第3期古段階前半（九鳳里段階）の長方形銅斧で、紀元前4世紀が上限とみられる。

時期が確実な鉄器も日本側では福岡県春日市平若A遺跡4次3号土壙墓出土の鑄造鉄斧破片がもっとも古く、共伴した土器片の下限は前期末である。一方、韓半島南部での鉄器の出現は南陽里段階より古くならず、弥生時代前期末（板付Ⅱc式）～中期初頭（城ノ越式）に南陽里段階を併行させてよい。南陽里段階の暦年代は、紀元前3世紀より前にはほとんど遡らないとみられる。そして、水石里式土器と靉島式土器の境界は、弥生時代中期初頭の城ノ越式期にあるとみられる。靉島式の上限は、韓国の全羅北道益山平章里遺跡の前漢鏡と共伴した細形銅矛が入室里段階にあたり、九州では汲田式甕棺から須玖式甕棺（古段階）に伴う細長化した型式に属するので、北部九州の日常土器の編年では須玖Ⅰ式段階に当たる。平章里前漢鏡の暦年代は前2世紀前半で、細形銅矛は身部が幅狭で長い新式である。したがって、平章里遺跡の青銅器は須玖Ⅰ式期の時期に併行して暦年代の1点が紀元前2世紀前半にあることを示し、併行する近畿第Ⅲ様式の暦年代も紀元前2世紀とみるのが妥当と考える。

弥生時代には、『漢書』地理志の「楽浪の海中に倭人あり。分かれて百余国となる。歳時を以て来たり献見すという」の一文からも、国が存在した。これは前1世紀の記録で、弥生時代中期後半に当たる。しかし考古資料でみると、北部九州での国の成立はさらに古い。

地域内の階層構造は、国の形成度に連動する。とくに墓地の様相や青銅器の保有相は、階層構造を敏感に反映

する。これらの青銅武器は韓半島では、北韓の平壤市貞栢洞1号墓で「夫租歳君（夫租という地域の濊族の政治的首長）」銀印に銅剣と銅矛が伴うため、首長層の権威を示す政治的な聖なる器物である。この取り扱いが北部九州でもそのまま再現され、その性格も引き継がれた。

福岡市の早良平野では、この時期の青銅器は圧倒的に吉武遺跡に集中する。ほかの拠点遺跡では岸田遺跡を除くと1～2本で、銅矛や多鈕細文鏡は持たず、さらに周辺には青銅器を持っていない小集落がある。したがって早良平野ではこの時期に、吉武を頂点とした階層構造がみられ、国という政治組織ができた。吉武の居住域は10万㎡を超えて、村全体をまとめる大型建物の床面積は115.2㎡だが、東入部の居住域は2万㎡ほどで大型建物の床面積が50㎡ほどである点も、階層構造を示す。この時期には各単位地域（国）に一つずつ、韓半島系の青銅器を集積的にもつ遺跡がみられ、それら青銅器の質と量は大同小異で優劣の差はないから、『漢書』の百余国体制は、この時期まで遡る。また、三条節帯銅矛は玄界灘沿岸地域の唐津平野や早良平野・福岡平野で出るが、鋳型は佐賀平野でしか発見例がない。同範品は未特定だが、生産地の国の範囲を超えて製品が分布するから、国々の連合体である初期筑紫政権も形成され始めた。

この時期の特色に、韓半島南部から渡来した粘土帯土器人の集住がある。粘土帯土器は水石里式系が多く、拠点集落の周縁部に渡来粘土帯土器人集団の居住区ができる。そのありかたは、福岡市諸岡遺跡のように変容粘土帯（変容水石里式）土器がなくて一時的な居住とみられる諸岡型と、佐賀県土生遺跡のように前期末～中期前半の弥生土器とともに少量の水石里式土器と多くの変容水石里式土器が出て、この地に長く居住し、地域社会に深く入り込み同化する過程を示す土生型がある。弥生土器に与えた影響も本研究で論点となった。

原の辻遺跡は土生型だが、水石里式と勒島式が共に多く、変容水石里式土器と変容勒島式土器もみられる。これは、粘土帯土器人が継続的に渡来・居住して、故地との交流回路を開設・維持した証である。居住地区は環溝の外、台地北西側の縁辺部に集落の周縁部にあたり、環溝内の中心部ではない。付近には中期前半の船着場がある。中心から制御されつつも、中心に入れば失う自由は確保して、韓半島系の工法で港の建設を指導し国の交易に参画して、周縁からも中心を制御する形で国づくりを促進したとみたい。ただし、原の辻遺跡や諸岡遺跡などでは無文土器系土器が集中するが、墓地では出ない。渡来人の在地墓制への吸収も考えられるが、佐賀平野や熊本平野では墓地での出土例があるから、渡来地で一生を終えずに故地に帰るか往來する無文土器人像が提起される。同様に韓半島南部の弥生系土器も、中期後半以降のいくつかの例と金海会峴里貝塚甕棺例を除けば、勒島遺跡をはじめ多くは墓地から出ず、往來する弥生人像が浮

上する。

また、青銅器生産は粘土帯土器人が渡来してもすぐには始まらず、継続的な交流と定住の中ではじめて導入される。この点で熊本平野の白川・加勢川・緑川流域の無文土器系土器集中遺跡が目される。中でも八ノ坪遺跡では新しく拓かれた周縁部のB地区で中期初頭～前半に無文土器人が集住し、変容無文土器とともに、石英長石斑岩製の鋳型や背部に馬のタテガミを表現した送風管、青銅器の湯口部の破片、銅滓などが出土。八ノ坪で無文土器人集団と青銅器鋳造の関わりを示す資料には、無文土器のほか上述の馬形送風管がある。九州の送風管は草本類を束ねて屈曲した芯を縛り、その上に粘土を巻き付けたのち、芯を抜くか焼いて作る。八ノ坪の馬形送風管も同様である。韓国で今回調査した青銅器鋳造用の送風管は安心遺跡出土品1点と新昌洞遺跡出土品1点で、いずれも馬形で屈曲し、安心例には耳、新昌洞例にはタテガミの表現がある。安心例は2号住居跡出土で、1号住居跡に切られる。2号住居跡は円形粘土帯土器の末期段階、1号住居跡は三角形粘土帯土器の時期である。新昌洞例は表面採集品で、所属時期は不明だが、おそらく三角形粘土帯土器の時期である。いずれも内面にラセン状の巻き付け痕跡（芯を縛った痕跡）があり、九州の例に似るから、馬形送風管も直接的には韓半島南部から伝来した。

弥生時代中期前半の熊本市上代町遺跡出土漆塗木柄は、茎挿入孔が円形のため細形銅剣の剣柄で、首長層の存在を示す。その時間的位置は遼寧式銅剣と細形銅剣の組立をi～vの方式に分けた金東一の研究が参考になる。i式は遼寧式銅剣で筆者の韓国青銅器1期、ii式は2～3期前半、iii式は3期後半、iv式は4期、v式は5期に概ね対応する。ii式で長崎県里田原遺跡例のように鐔部が明確になり、iii式で吉野ヶ里遺跡北墳丘墓SJ1002号例のように茎固定部ができる。iv式は関端受け部ができて茶戸里遺跡1号墓例があり、v式で茎挿入孔はそれまでの円形から長方形になる。上代町例は茎固定部を作り出すからiii～iv式で、関端受け部をわずかに作り出す点はiv式の可能性もあるが、中期前半という時期からすれば、iv式よりもiii式とみられる。実際、iv式の典型である弥生時代中期後半併行の茶戸里遺跡1号墓の銅剣の柄よりもやや太い。一方、韓国の光州市新昌洞遺跡の木製剣柄は、ii式の1点を除くといずれもiii式で、土器は断面三角形粘土帯土器が主体で、上代町遺跡とほぼ同時期とみられる。ii式はそれ以前の水石里式土器の時期と考えられ、筆者の韓国青銅器2～3期前半にあたる。

なお、これまで対馬では水石里式の円形粘土帯土器はないとされたが、井手遺跡で複数出土して、対馬でもこの段階の細形青銅利器が存在して国が形成され始めた可能性が浮上した。

『日韓交渉の考古学—弥生時代篇—』（1991年）では韓

半島出土の広形・中広形の銅矛・銅戈を集成した。その後の出土品のうち、金海良洞里遺跡出土例は、200号墓の広形銅矛1点を除けば、いずれも三国時代まで伝世された副葬銅矛である。

今回の資料調査ではこの他に、城山貝塚出土品で報告書未掲載の廃棄銅矛（広形銅矛の鋒部近くの破片）を確認した。全体的に厚さが薄いのが気になるが、樋が合することなく終わっており、幅からみても広形銅矛とみておく。あるいは叩き延ばされたかとも考えられる。

これに対して金海大成洞88号墳出土中広形銅矛は、三国時代前期までの伝世品である。この銅矛の中子は灰色砂質のため、福岡県春日市須玖遺跡を中心とする奴国での製作とみられる。報告書では袋部端付近の節帯の線が表現されていないが、実見した結果では横線を明瞭に確認できた。

金海内德里19号墓の広形銅矛は墓壙内の片隅に袋部を下にした直立状態で出土した。削平のために全体の下半部しかないが、背部に鎬がみられる。中子は赤味を帯びた粘土質で、奴国以外での製作品である。共伴の土器は三韓土器前期新段階の瓦質土器袋壺と瓦質土器組み合わせ牛角把手付長頸壺で、弥生時代後期後半（下大隈式）でも古段階に併行し、この時期に確実に韓半島まで広形銅矛がもたらされたことを立証する。このほかに、金海内德里19号墓では剣装具を備えた変形細形銅剣（深樋式銅剣）1点と、半球形飾金具5点なども出た。

このほか、金海会峴里貝塚と城山貝塚で出た半球形飾金具も調査した。金海会峴里貝塚例は報告書では上半部が無文だが、今回文様を確認した。城山貝塚例も改めて文様を確認した。

対馬では日本産の中広形・広形の銅矛や広縁の小型仿製鏡も数多く出土する。小型仿製鏡は外側から、櫛歯文帯の次に内行花文帯が続いて奴国産の特色を示し、銅矛も袋部の中空をつくるためにあらかじめ設置する中子が砂質で灰色を呈する奴国産が多い。こうした銅矛は、北部九州から壱岐にかけて村のマツリや国、国々の祭りに用いられた祭器で、多くは銅矛だけが埋納され（単一器種埋納）、ときに破片が生活遺構に廃棄される（廃棄銅矛）。対馬では生産地でもないのに異常に集中して、墓に副葬される（副葬銅矛）と共に、少数（多くは1～2点）の銅矛が舶載青銅器などとともに墓地の一角に埋納されたり、対馬独特のX字形に埋納されたりする。これらは対馬の人々の銅矛保有を示すが、それだけでなく北部九州と同様に鋒部と袋部を互い違いにした打ち違えた単一器種大量埋納例があり、主要製作地である奴国から対馬国までの国々が国境の島で、「朝鮮や中国に送りだす使節が無事に航海を終えてよきものとことをもたらすように」と祈願した国々のマツリの存在を示す。

そしてこれらの中広形・広形銅矛は、一部が金海圏域を中心とした朝鮮南部にもたらされるが、意味変換が起

こって埋納はされず、金海良洞里遺跡や金海大成洞古墳群89号、金海内德里19号木棺墓の例など、原三国時代だけでなく三国時代まで伝世した品も含めて多くは副葬銅矛で、少数が廃棄銅矛である。同時にもたらされた小型仿製鏡は奴国産のため、これらの銅矛も多くは奴国産とみられ、その裏には対馬人の活躍がある。

弥生時代後半期の対外交渉について、筆者はこれまで農村とは異なり漁撈活動の比重が高く、さらに交易も担った海辺の集落を海村と名付けた。典型的な例は福岡県糸島市御床松原遺跡で、隣接する新町遺跡も含む。すべての集落遺跡の中から海村や漁村・山村を抽出する目安は、石庖丁の数量である。御床松原遺跡は弥生時代から古墳時代にかけて石錘が異常に多く、鉄製の釣針やアワビおこしもあり、網漁の比重が高くて、潜水漁法も行う。また、板状鉄斧や鉄素材、楽浪土器、中国銭貨など、海上交易活動を示す遺物も出ている。ここからはイネの補摘み具である石庖丁が出るため、もちろん農業もした。しかし、その石庖丁の数量（12点）自体は、発掘面積と同時期の竪穴住居の数がほぼ同じで、しかも農村である佐賀県鳥栖市安永田遺跡の石庖丁の数量（63点）のおよそ5分の1なので、農作業の比率もその程度であった。したがって、御床松原遺跡のように、周囲の遺跡よりも漁撈具の比率が高くて海上交易品が出る沿岸部の漁村は、海村と見てよいといえる。地理環境や『魏志』倭人伝の「南北市糶」の記述から見て海上交易活動の比率が高い対馬でも、これまで石庖丁はほとんど出でおらず、島全体が海村で占められた。壱岐では原の辻遺跡とカラカミ遺跡が代表例である。

海村からは、さまざまな中国・韓国系の遺物（板状鉄斧、原料鉄・鉄素材、三韓土器、楽浪土器、中国銭貨など）が出土する。東アジア世界の交易網に組み込まれて漁村が海村となり、これらの海村は原の辻遺跡を除いて国邑よりもはるかに小さい規模であった。

日本で出土する楽浪土器は海村を中心に出でおり、その様相から1～2点の対馬型、3点以上が散漫に分布する原の辻型、狭い地区に集中する番上型が設定できる。

また、中国銭貨を見ると、日本列島で出土した主な中国銭貨には半両銭、五銖銭、貨泉があり、海村を中心に日常生活域から出る場合と、墳墓の副葬品とに大別される。副葬例は内陸部に多く、三点までが大半である。海村では、原の辻遺跡16点（五銖銭1点、大泉五十1点、貨泉11点、不明銭2点）、御床松原遺跡（隣接の新町遺跡を含む）は6点（半両銭2点、貨泉4点）、元岡遺跡は9点（五銖銭1点、貨泉8点）、今宿五郎江遺跡（隣接の大塚遺跡を含む）は貨泉5点、楽浪系土器はないが鳥取市青谷上寺地遺跡は貨泉4点であり、生活域から4点以上が出る。ほかに岡山県高塚遺跡では貨泉25点、大阪府亀井遺跡でも貨泉4点が知られ、この2遺跡は海村ではないが、いずれも海辺の遺跡で交易では海村に準じ

た役割を果たしたとみられる。重要なのは、海村の多くが原の辻遺跡を除くと国邑ではなく小規模な集落であるとともに、国邑やそれに準ずる集落では三雲・井原遺跡0点、須玖遺跡1点、吉野ヶ里遺跡1点、須玖遺跡1点、比恵・那珂遺跡0点、唐古・鍵遺跡0点など、ほとんど皆無な点である。つまり同じ中国製品であっても、完形中国鏡の場合と異なり、国邑は中国銭貨をほとんど保有していない。これは楽浪土器も同様で、多くは海村の日常生活域で出ており、国邑や、それに準ずる大きな拠点集落の墓では、原則的に出ない。

海村の中国銭貨は生活域から出て生業に関わる器物なので、海村の主要な二つの生業のうち、漁撈ではなく海上交易活動での対価に用いられたことになる。中国銭貨の弥生青銅器原料説も根強いが、弥生時代後半期の鋳型は、海村では皆無か少数で、銅滓や中子、るつぼ、溶解炉、送風管などの鋳造関連資料もない。逆に多数の鋳型や鋳造関連資料が出た須玖、唐古・鍵、比恵・那珂遺跡では中国銭貨はほとんど出ない。

つまり、当時の対外交渉・交渉には、楽浪土器の様相で述べた下層に対馬と対岸の金海地域との日常的な交易（三韓交易）、中層に海村世界での中国銭貨を用いた交易（楽浪交易）があり、上層には三雲・井原遺跡での番上型に象徴される楽浪郡や中国王朝、三韓諸国との政治的外交交渉が位置する。

この点で韓半島の勒島遺跡も弥生時代中期初から後期初の海村であり、中国銭貨が5点出ている。弥生時代中期後半から後期初併行期の楽浪土器も出ており、日韓海村交易網の結節点だが、唯一無二の存在ではない。韓半島南部の楽浪土器や五銖銭・貨泉の様相からみて、西海岸から西南海岸部に、いくつか結節点となる遺跡の存在を想定しておくべきであろう。そして、楽浪土器は壱岐から糸島に多く原三国時代の三韓土器は対馬・壱岐に多く福岡平野にもそれなりにあるという偏在性から、金海—対馬—壱岐—福岡という三韓（弁韓）交易と、楽浪—
〈 〉—〈 〉—勒島—（対馬）—壱岐—糸島という楽浪交易の軸も想定されよう。また、日本列島の中国・四国・近畿地域のようにあまり楽浪土器が出ない海村も海村交易ネットワークの一端を担い、さらに海辺の拠点集落も加わったと見ている。当時の交易は、日本列島側の視点だけで解釈できるものではなく、韓半島や中国大陸側に立った視点での研究が要請される。

なお、対馬では三根遺跡に楽浪土器がやや集中し、対馬での原の辻型の存在も考えられるようになった。ただし、ほかの遺跡での三韓土器と楽浪土器の数量は、三韓土器が圧倒的に多く、三韓土器だけが出る遺跡が多い。この点で、対馬市上ガヤノキ遺跡では楽浪土器の出土が報告されていたが、実見した結果は透孔があって新羅土器台付壺の台部と判明し、楽浪土器はない。それとともに三韓瓦質土器では広口壺の破片と共に袋状壺も確認し

て、対馬で楽浪土器出土遺跡はごく一部であることを再認識した。

重さをはかる秤のおもりである権には、すでに述べた天秤権の他に、一本の棒（棹）に吊るしたおもりをスライドさせ平衡をとって重さをはかる棹秤に用いた棹秤権もある。弥生時代の日本列島には天秤権と棹秤権の両方があった。

最初に知られたのは原の辻で出た青銅製の棹秤権で、鉛同位体を分析したところ、素材の鉛が中国産で、弥生時代の三遠式銅鐸や広形銅矛などに近いこと、弥生時代後期に属する可能性が高いとされた。

いっぽう、鳥取市青谷上寺地遺跡の石権は三点あり、報告書では銅鐸形石製品と報告された。しかし、銅鐸の模倣品には銅製品や土製品があり、いずれも中が空洞で、舌（ぜつ）という棒をぶら下げると舌が当たって音が鳴る。これに対して、青谷上寺地遺跡の三点は中空ではなく中実で、しかも実際に使って吊り下げた際の吊り手（鈕）の孔とその付近の紐ズレ痕や、破損防止のために身部を緊縛した紐ズレの痕跡があるので、銅鐸形石製品やその未成品ではなく石製棹秤権である。

このほか、貨泉が4点出た亀井遺跡でも1981年7月にSK3165土坑から石製の天秤権が出ていたことが判明した（森本晋 2012）。以後、各地で天秤権や棹秤権の報告・再報告が相次いだ。

天秤権・棹秤権は、これまで空白だった中国四国地域をはじめ各地で出土例が増加しており、海村だけで使用されるのではなく、拠点集落での計量にも使用されたが、交易の場での使用頻度が高かったと考える。今回の研究で、石製天秤権は、「弥生分銅」ではなく「円筒権」と呼ぶべきであること、これまでで最古となる円筒権が福岡県春日市須玖遺跡で出ており、その中に半円筒形に近い形を含むこと、さらにそれよりもさらに古くなって下限が弥生時代前期末～中期初頭で、形態もさらに細長い円筒権が韓国全羅北道全州市馬田遺跡Ⅱ区溝4で円形粘土帯土器と共に出土していたことを明らかにした。

弥生時代で最初に石硯・研石とされたのは、鳥根県松江市田和山遺跡の石製品2点だが、弥生時代の伊都国の国邑である福岡県糸島市三雲・井原遺跡での石硯の発掘で、にわかに研究が盛んになった。三雲・井原遺跡で最初に発掘された石硯は、長さ4.6cm、幅4.3cmの砂質片岩製である。2015年12月2日に出て、時期は弥生時代中期後半から古墳時代始めである。その後、2016年9月29日には、もう1点出ていたことが報道された。

漢代の石硯には現在の硯のような海はない。漢代の墨は小さな粒で、墨汁をつくるには硯の上に置いて水を加え、小さな平面方形の研石に木製の把手をつけて上から磨りつぶす。石硯と研石の2点で1組になるため、各遺跡で出た石硯や研石は一括し、各遺跡名を付けて〇〇硯と呼ぶ。

番上硯1・2を石硯と断定した特徴は三つあった。

第一はうすく平らに剥がれて金雲母上の粒子を含む灰黒色の砂質片岩が石材で6mmほどの厚さを持ち、これまで楽浪郡で発掘された長方形石硯の材質と共通する。

第二は、裏面が加工されず母岩から割り剥いだままの状態が残された点である。これは、楽浪彩篋塚(南井里116号墳)から出た硯台の復元品からも分かるように、漢代の石硯は硯台にはめこんで使い、裏は全く人目にふれないからである。小型で厚さも5mmとやや薄い、長方形石硯の完形品である楽浪郡王盱墓の石硯をみれば一目瞭然で、やはり裏面は割り剥いだままである。

第三に、こうした石硯は大きな板材に縦横の直線的な溝を厚さの中ほどまで擦り切って、残りは割ってつくる。側面には擦ったV字の溝の片方が残るため、側面が表面ないし裏面とは直角にならず鈍角をなす。しかも側縁の割った面(破面)はそのまま残すか擦って平滑に仕上げても、最初の溝の壁と明確に区別できる。

日本列島での文字使用は、番上硯の発見で弥生時代にさか上った。それは、これまで予想された通り、外交交渉の場で使われたとみられる。問題は海村交易世界でも文字が使われたかである。この点で田和山硯が注目され、時期は弥生中期後半である。石硯の上面は磨研で平滑に仕上げ、下面は粗割のままで磨研していない。ただし、石材は内部が白色で、凝灰岩と報告された。研石の石材は楽浪で使用された石硯・研石と同様に砂質片岩とみられる。上面は割ったままで研磨せず、木製の把手を付けたとみられる。田和山硯は実用品ではなく有力者の権威の象徴との声もあったが、今回の番上硯の出土で、やはり実用品と考えるべきである。田和山遺跡自体は海村とはし難いが、付近に海村があり、海村交易の場で文字が使われた可能性を示す。勒島遺跡は、弥生系土器が大量に出る海村交易の一大結節点で、B地区カー245号住居跡から出た勒島硯には鉄製の棹秤権や弥生時代中期後半の弥生系土器が伴うことも、この可能性を支える。

なお、弥生時代の石硯・研石については、各地の発掘資料が見直されて候補品が数多く報告されるに至っているが、砥石との弁別に問題が残っており、今後の検討に譲ることとした。

また、これまで韓国の嶺南地域で広く出土しながら、日本列島では全く出土例がなかった錨形鉄器が福岡県春日市竹ヶ本B遺跡の2次調査で土壙墓とみられる1号土坑から出土していたことを明らかにし、更には、近畿地域にも弥生時代前期初頭にすでにタタキ技法が伝播していたことにも言及した。

幸いにも本研究の成果もあって、令和2年度から4年度の3年間の予定で、武末を研究代表者とする科学研究費基盤研究(C)「日韓弥生・古墳時代石硯・研石の再検討」が採択された。

星乃は日独交流に関する断続的資料調査を、日本(国立公文書館、外交史料館、東京大学、佐野常民記念館など)とドイツ(イエナ大学、日独文化センターなど)を中心に行った。そして、それに基づく、成果報告として展示会やシンポジウムを開催した。これは同時に、市民向け講座にまで及び、これによって、公開性が担保された。中でも、イエナ大学等と協力して2018年5月4日～7月1日にかけてヴァイマルで展示会「菊と鷹:カール・アレクサンダーと日本—ヴァイマル・イエナ・東京(Chrysantheme und Falke. Carl Alexander und Japan-Weimar・Jena・Tokyo)」を開催した。

知見をベースに、成果発表として、対象としたテューリンゲンが東ドイツに属していたところから社会主義論に展開するなど、各学会等におけるコメントが可能となった。同時に、雑誌などペーパー媒体による研究論文の公表も行った。

3 研究業績

〔論文〕

武末純一2018「南北市糴—対馬にみる日韓交渉—」『倭の境界 対馬国』46-51頁

武末純一2019「弥生時代に文字は使われたか」『18歳からの歴史学入門』99-121頁

武末純一2019「福岡県春日市竹ヶ本B遺跡の錨形鉄器」『古墳と国家形成期の諸問題』395-400頁

武末純一2019「近畿の弥生土器甕のタタキ面」『磨斧作針—橋本博文先生退職記念論集—』33-38頁

武末純一編2020『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—(最終報告書 論考編)』「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会 総712頁

〔共著〕

植上一希、伊藤亜希子、星乃治彦他『日常のなかの「フツー」を問いなおす:現代社会の差別・抑圧』法律文化社、2018年。

Ostasien im Blick—die universitaet Jena und Das Grossherzogtum Sachsen-Weimar-Eisenach 1873-1945, in: *Quellen und Beitrage zur Geschichte der Universitaet Jena* 17, Franz-Steiner-Verlag Stuttgart 2021年出版予定

〔論文〕

星乃治彦、大久保里香「「ドイツ—刃倒」と伊藤博文の独逸憲法調査」『福岡大学人文論叢』50(4)、2019年、929~959頁